

ボランティア等交流・体験学習 ～自己の発見と他者の理解～

経済学部 ヒューマンエコノミー学科 李 義 昭

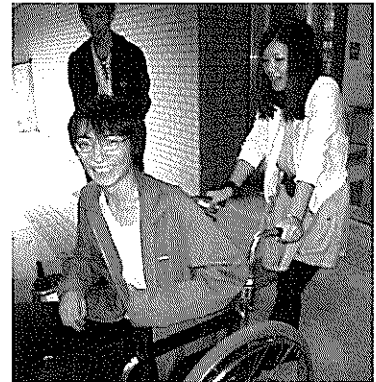
はじめに

この授業は、平成 21 年度特色ある教育の「体験に基づく発見的・自己開発的な学習」をテーマに行われたものである。ここでは、学生が日ごろの生活では経験することの少ない日常生活体験に出会うことにより、その現実と現状を知る。そこから生まれた気づきや課題を、解決して行くことによって、学生が他者を知り、自分に気付き、自らを開発し、成長していく事を期待するものである。

1. 授業のねらい

■ 1. 交流・体験学習

私たちが日常に交流を持てる人々の数はごく限られており、生涯に体験できる物事も一定の範囲でしかない。私たちは多くの場合、同じような境遇の人々と、同じような環境で生活を送っている。大学生にとって、日々大学へ通う大学生活は当たり前であると思い込んでいるように、人々は自身の周りの環境がごく普通であると考えやすい。しかし、「多文化理解や多民族の共生」が言われるように、高齢者や障害者、その人たちを支える家族や支援者など、大学生とは、全く異なった境遇や環境で日常生活を送っている人々にとって大学生活をおくることは非日常的出来事なのである。大学生がこのような人々と交流を持つことは少ない。この授業では、いわゆる障害当事者たちと交流を持ち、互いに学びあうことによって、学生が自らの人生の目的に気付く事をねらいとする。



■ 2. 共同作業

人は社会的な存在であり、他の人と関わりを持ち、助け合わないと生きていくことは出来ない。人を生み育てていくのは、男と女の共同作業に始まる。家庭生活は親や子、兄弟姉妹による共同作業であり、学校生活は先生や友人との共同作業である。社会生活も会社の同僚やご近所との共

同作業である。人々は共同作業の中で、大きくなり、役割を果たし、生きがいを感じる。この授業では、学生がイベントを企画し、その成功に向けて、課題解決の役割を分担して作業を行い、自らの存在の意味に気付く事をねらいとする。具体的には、障害者と家族、その支援者などとの交流・体験学習を企画し、その受け入れのための準備を行う。障害当事者を受け入れるための知識や心の準備の習得が必要であるし、車いすの取り扱いなど障害当事者を支援するための技術の習得も必要である。イベント会場におけるスロープやトイレの配置など、施設内の障害者などへの配慮や設備に関する調査も必要であり、逆に、障害者などの行動の制限など施設内における制約についても十分に知っておく必要がある。さらに、これらの学習や体験を他の学生に伝え、経験を共有するための、プレゼンに関する知識や技術を身につけなければならないし、それらの学習や体験の成果に共感してもらえるようでなければならない。



2. 授業の内容

障害者本人、家族、その支援者とともにUSJ（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）で一日を過ごし、大学生にとっては非日常的であり、障害当事者にとっては日常的である生活を体験するイベントを企画した。施設内における①障害者のためのサービスの調査、②効率的な移動コースの研究、③イベントのための必要費用計算と支出管理、④車いすの取り扱いと移動、⑤体験学習のプレゼンテーションの準備などを目標に掲げ、準備を進めた。本年度はグループ分けをUSJ当日の参加当事者に対応したものとし、それぞれのグループにプレゼン準備担当者を配置した。学生は共同作業によって、車いすの取り扱い・障害者移動介護の講習、USJ施設内の移動と案内の事前調査、発表のための準備を行った。具体的には、2日間にわたって、車いすの取り扱い・試乗体験、障害者の車いすから座席への移動介助の練習を行った。また、USJ当日のしおりをそれぞれのグループで作成した。

10月23日のイベント当日は、障害児交流センター「ヤンヤンのうち」の会員・関係者から、2家族4人とヘルパーと当事者5人計9人の障害者本人、家族、支援者が参加した。US

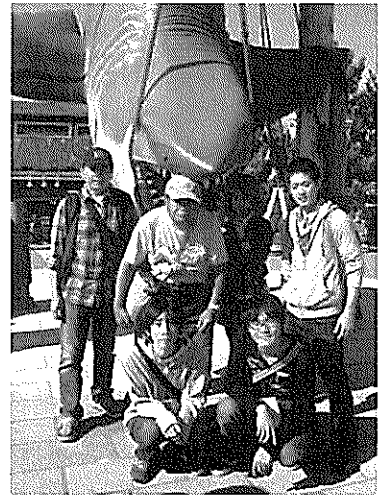




J内では、それぞれ5グループの少人数に分かれて、10時から昼の食事をはさんで、4時まで行動した。学生は自分たちと異なる生活環境にある、障害当事者の日常生活の一日を体験し、当事者である本人および家族・支援者と交流をもった。

3. 他者への理解と自己の発見

- ゲストは積極的にコンタクトをとりに来てくれる、明るい方でした。
- アトラクションによっては車いすでは無理だということもあり2人がかりでもしっかりと連れて行けなかったことが悔しかった
- 段差が多いと歩道になかなか上がれずトイレやお店等行きたいところに遠回りしていくお店やご飯を食べるところは車いすにとってはせまく感じました
- 停止する少し前に光るブレーキランプのようなものがあったもいい
- 私達の為にアトラクションを止めてくれ、乗りやすいのを用意してくれました
- 階段を降りるときに地面が濡れていて滑りやすかったのに、手すりがなく危ない気がしました
- 見た目では判断しにくいような方でも何一つ不便なく遊べるような環境にすべきだと思います
- アトラクションとアトラクションの距離が長く歩くのに大変
- 自動販売機が普通のタイプで一人では買いにくいから障害者用を設置すればもっと良い環境になる
- 障害を持っている方と行動すると、普段は何気なく見過ごしているような事でも改善してほしい事が多く見えました
- 交流したゲストと会話して親しくなったことで、彼の人間性を見た
- 自分の目で見、感じる情報の方が、インターネットや本で見るよりも、新鮮味があり、真



実味がある。

- バリアフリー施設やシステムを用意していたことで障害者など体の不自由な人でも、制約はあるものの、楽しめるようになってきた
- 交流に不可欠なのは「思いやる」心が大切である
- ゲストのジュースだけにストローを付けて渡すと、特別扱いされていると、叱られた
- 障害者と接する機会があるときは、体が不自由とかに関係なく、特別扱いすることなく、接したいと思った
- 歩道にあがれる場所を探したり、歩道に進入出来る道を探したりするのに苦労した
- バリアフリー化は完全とは思いませんでした。改善できるところはありました。
- 車イスを押したり、障害者の方専用の補助器具を見たりと、普段経験できない貴重な経験が出来たと思います



以上は学生の発表の引用である。社会のシステムに関心をもった者、それなりの設備と対応があれば、障害者の社会参加が可能であると気づいた者、新たなふれあいや交流の発見を楽しんでいる者、他者への理解には自己への理解である自己覚知が必要であることに気付いた者、多くの感謝の言葉や態度をうけて恐縮し喜んでいる者、何事も中途半端にいい加減な気持ちでは出来ないことに気づいた者、さらに前へ進みたいと思った者など、それぞれに多くの理解と発見があったようである。



4. 障害当事者の学生への評価

参加障害当事者からは学生に対する交流学习評定を頂いた、A：優れている、B：やや良い、C：よい、D：努力を要するである。また、その他で感想・意見を頂いた。なお、数字の合計が合わないのは、評定に無回答があったまたは車イスを使用しない障害者がいたためである。

■ 1. 流学習評定

		A	B	C	D
学習態度		10	6		3
基礎知識	車イスの取り扱い	11	4	1	
	コミュニケーション能力	9	6	1	3
他者への理解	障害者本人	8	8		3
	家族・介助者	8			3

■ 2. その他（感想・意見など）

以下はUSJの日常生活体験に協力いただいた、障害当事者（本人・家族・支援者）の感想・意見の一部である。

- また機会があったら遊びに行きましょう。ありがとうございました
- また機会があったら会いたいです
- 楽しかったです
- 面白かったです
- 冷静に人の話を聞いていて落ち着きがあって会話していて心地良かった
- 物静かなタイプに見えたけど良く気配りが出来ていて人間関係を作ろうと努力していた
- 物静かな人柄で人の話をよく聞いていた
- 会話力があり言葉のキャッチボールが出来ていて人間関係を作るのに意欲的だった
- よく観察はされていて、良く手助けをしてもらいました。ありがとうございます。もう少しリーダー的な積極性がほしいです
- 常にグループのことを気配りが出来ていました。最後は、疲れているところもあり、他のメンバーを信頼してください
- 私に気をかけたりして優しい所はあります。しかし、コミュニケーションが続かないので努力が必要です



おわりに

この授業では、学生は障害当事者の日常的な一日を体験・観察した。また、その日のために共

同で作業を行い、それぞれの役割に気づき、また、役割分担の難しさにも直面した。社会には多くの課題がある、さまざまな人々が存在し、それぞれに課題を抱えていることに気付いた。その課題に対する自分の気持ちを受け入れ、そこから一歩踏み出さなければ・踏み出したいと感じた者、同じ課題に向かって行く中で自分のやるべき事を発見した者、体験したこと、心に感じたことを伝えようとしている者、学生たちは、それぞれの位置で、それぞれの自己に向き合っている。この体験をもとに、自己を開発し、今後の研究に結び付けてもらいたい。さらには、福祉と経済の両面の視点から経済社会を見る事が出来る人間に育ってもらいたい。

